No. 151

ティーブレイク

Tea Break

青が散る

会員　正林　真之

「青が散る」は，宮本輝の代表的な青春小説であり，テレビ化もされた。その小説では，テニスと恋愛を通じて，傷つきながらも成長していく若者の姿が描かれている。その中では，ある者は死に，ある者は生きる。だが確実に，生きているほうは，純粋さが失われて，世の中の現実というものに染まっていくようになる。

これを青が散るという表現に凝縮させているわけなのであるが，ここの登場人物というのは，29歳とかのレベルで見ても，青く感じられるであろう。この小説の前半は，それくらいに青い。

ところで最近，ひょんなことから取引先の社長と二人で海外出張に出かけることになった。日程は極めて短く，用事もあるにはあったが，その中でも自由時間があったので，いろいろと見物に行く。すると，意外に楽しい。女性がよく，友人同士で海外旅行に行ったりするが，その気持ちもわからないものでもない。意外に楽しかったのである。

よくよく考えてみれば，男同士で行く旅行など，学生時代以来である。少なくともこの業界では，私と一緒に旅行に行く者など居ない。

ところが，変な偶然は重なるもので，帰国した途端に，大学の同級生から連絡があり，ミニクラス会をやるという。大学卒業以来，初めてのことなので，参加してみることにした。

ところで，弁理士というのは一般に，外見も若いが，気も若い。なので，普通の人というのは，こういったクラス会に参加すると，学生時代に戻ったような気になるのであるが，我々は，そうなるどころか，逆に，現実の世界に引き戻されることになる。つまり，今の自分の年齢の「現実」というものを，クラス会に参加している仲間から教えられるのである。彼らの外見を見，その話を聞き，そこから「自分はいつまでも若いと思っていたが，やはりトシなんだ・・・」と思わざるを得なくなるのが，同窓会である。

ある友人は，理系だというのにずっと人事畑であった。彼曰く，「人事やってて，一万人のサラリーマンの浮沈を見てきたが，所詮は運だと思った」「もう早くサラリーマンなんか辞めて，リタイヤしたい」ということであった。

確かに，運はある。会社の出世というのは障害物競走のようなもので，実力以外にも，どこを通るのかという運の要素も大きい。だが，会社の生活はともかくとして，人間の人生というものを考えた場合には，それが障害物競走とは異なるのは，定年後，すなわち障害物を潜り抜けた後の状態や生き方が，結構大事であるということである。

しかしながら，そうであるにしても，ひとつのポイントは，世の中には，自分の定年を自分で決められる人間と，そうでない人間が存在するということである。むろん，後者のほうが，数は圧倒的に多い。

なぜ最近に会ったばかりの社長との旅行が楽しく，思い出深い同級生との会話が憂鬱だったのか。青の散り方に差があったのだとしたならば，残っている青だけでもないがしろにせず，大切にしていきたいものだと，つくづくそう思ったのである。